

〈論文〉

## 台湾華語の句頭における 「啊 (ah)」について

渡 邊 俊 彦

### 要 旨

本稿は、台湾華語の句頭に出現する「啊」を扱い、関連の先行研究からこの「啊」が台湾で使われる理由を整理することを目的とする。句頭とは、発話の最初あるいはフレーズの最初の位置のことを指す。この台湾華語で句頭に「啊」と表記されるものの中には、感嘆詞の用例のみでは解釈しがたいもの、すなわち規範的とされる用法から逸脱するものが存在する。その発音は多く [aʔ] (—ah) と発音されること、ならびに台湾という地域における言語環境の歴史的な経緯から閩南語の影響を受けたものと推測し、閩南語の「啊」に関する先行研究を整理した。その結果、先行研究では閩南方言を母語のひとつとする地域において使われる標準中国語を「地方普通話」として部類した上で、それは規範的とされる中国語の習得途中で形成された一種の中間言語であると見做す。つまり、本稿で扱った台湾華語における句頭語気助詞「啊」を含む方言要素は、基本的に転移の結果であることが先行研究からの大まかな見解であった。一方で行政院主計総処（2010）の統計を前提として、台湾人口の約8割にあたる人が家庭内で閩南語、あるいは閩南語ともうひとつの言語として台湾華語を使っていることを考慮すると、一概に習得途中において形成された一種の中間言語として台湾華語を位置づけ、その中で句頭語気助詞「啊」を単なる転移の結果とするのは、今後も引き続き議論が必要であることを本稿は指摘した。

キーワード：台湾華語，台湾国語，句頭語気助詞，閩南語

## 1. はじめに

本稿は、台湾華語の句頭に出現する「啊」を扱い、関連の先行研究からこの用法が台湾で使われる理由を整理することを目的とする。

台湾華語とは、台湾において規範的とされる標準中国語のことを指す。本稿では、その規範的とされる台湾華語の用法から逸脱した用例の「啊」を扱うが、台湾に暮らす人々が日常的かつ規範性を特に意識する必要がない状況下、すなわち自然な発話において使用するいわゆる「台湾（人）の標準中国語」のことを一律して「台湾華語」とする。句頭とは、発話の最初あるいはフレーズの最初の位置のことを指す。

本稿が扱おうとする、句頭における「啊」の主な例は、(1-1) のとおりである<sup>(1)</sup>。

(1-1) A: 啊你要去哪裡? 飯要煮好了。(どこへ行くの? ご飯がもうできますよ<sup>(2)</sup>)

B: 我同學家。(クラスメートの家へ)

A: 這樣喔, 啊你不能明天再去嗎? 很重要嗎? (そう, 明日じゃだめなの? 大事な用事?)

B: 對啊。(そう)

A: 那這樣, 那快去快回。(そう, なら早く行って早く戻ってきて)

(1-2) 檢查員: 喂, 6432 嗎? (もしもし, 6432 号車ですか?)

司機員: 6432 你好。(6432 号車です, どうも)

檢查員: 嘿。(はい)

司機員: 嘿你好。(はい, どうも)

檢查員: 啊你現在車子是怎樣? 有問題嗎? 我檢查股。(そちら

今、車両はどのようなですか？問題ありますか？こちら整備部門です。

司機員：剛剛電門速有時候拉的起來，有時候沒有，時有時無。  
(先ほどマスコンがある時は引けて、ある時は引けない。できたりできなかったり。)

検査員：啊你停軌機的燈有亮嗎？(ブレーキ灯は光っているか？)

検査員：有時候會有時候會沒有喔？(光ったり光らなかったりということ？)

(中國時報電子版 2018. 10. 25<sup>(3)</sup>)

例中において下線部の「啊」は、標準中国語における感嘆詞の用法と異なる。「啊」の字のみを根拠に中華民国教育部国語推行委員会『重編国語辞典修訂本』のインターネット版<sup>(4)</sup>(以下、教育部国語辞典とする)をひくと、「啊」あるいは「阿」の感嘆詞としての用例にたどりつき、次のとおり例文とともに解説されている。

(1-3) 啊！失火了！（あ！火事だ！）

(1-4) 啊！這片風景好美！（ああ！この風景はとても美しい！）

(1-5) 啊！你說什麼？（ん！何だって？）

(1-6) 阿！你怎麼啦？身體不舒服嗎？（あら！どうしましたか？具合が悪いのですか？）

教育部国語辞典の解説において(1-3)と(1-4)は驚き・苦痛・賛嘆を表すものとされ、(1-5)は疑問・問い返しを表す。(1-6)は用字を「阿」とするが、やはり疑問・驚きを表すとされ、基本的に「啊」と同一と考えられる。他方、(1-1)や(1-2)の「啊」を、教育部国語辞典の解釈に当

てはめ、感嘆詞として見た場合には、驚きを言い表していると思ふことができる一方で、同一会話内で多用できる点、またその場合に「啊」が言い表す意味は必ずしも一様に驚きを表しているとは言えない場合が存在する。

さらに、発音の観点より考察した際、(1-1)～(1-2) と (1-3)～(1-6) は異なり、前者は多く [aʔ] (-ah) と発音され、後者は基本的には [aʔ] (ā) または [a] (a) と聞こえることから、前者は閩南語の影響を受けたものと推測できる<sup>(5)</sup>。要するに、台湾華語で句頭に「啊／阿」と表記されるものの中には、(1-3)～(1-6) の用例のみでは解釈しがたいもの、すなわち規範的とされる用法から逸脱すると考えられるものが存在すると言える。

## 2. 研究の背景と本稿の構成

台湾という地域における漢語系言語環境の形成は、歴史的な経緯より対岸の福建省一帯の方言、すなわち閩南語と深い関わりがある<sup>(6)</sup>。それに加え、1945年の中華民国による台湾接收を経て、北京音を標準とする中華民国の「国語<sup>(7)</sup>」が台湾内に持ち込まれたことから、現在までいわゆる多言語社会を形成する。

台湾の行政院主計総処(2010)の統計によると、現在台湾で暮らす6歳以上の国民は、国語と閩南語を使用する者が最も多いとされ、統計より家庭内においては100人あたり83.5人が国語を使い、同じく81.9人が閩南語を使用するとされる<sup>(8)</sup>。この数は、家庭で使用する言語は、一種または一種以上であるとした上での相対値(相対人数)であり、言い換えれば、台湾人口の約8割にあたる人が、家庭内で閩南語、あるいは閩南語ともうひとつの言語として国語を使っていることを示す。言語間の使用分布に年齢差が存在するものの<sup>(9)</sup>、台湾においてはおおむね国語と閩南語が使用さ

れていることが、この統計より知り得る。つまり、台湾に暮らす人々が、日常のかつ規範性を意識する必要がない状況下、すなわち自然な発話において使用する台湾華語の中には、当然この閩南語の影響を受けるものがあると考えられ、規範外の用法が一定程度みられる。

これらを踏まえ、なおかつ本稿の目的から、以下閩南語の句頭の「啊」に関する先行研究を整理すること、ならびにそこから台湾華語の「啊」との関連性を見だしその特徴および発生の所以を論じたい。

### 3. 先行研究から見る閩南語「啊」と台湾華語の関係

#### 3.1. 語気助詞としての閩南語「啊」とその概要

閩南語の句頭における「啊」については、楊秀明 (1996)、林华东 (2007a, 2007b)、陈晓云 (2011) が詳しい。楊秀明 (1996) は閩南漳州方言における句頭語気助詞「啊」を単独で取り上げている。林华东 (2007a) は閩南方言における句頭語気助詞を「啊」とそれ以外について複数取り上げ、林华东 (2007b) では句頭だけでなく、句末の語気助詞も論じている。陈晓云 (2011) では、閩南語以外の他の中国語方言に見られる句頭の語気助詞について論じている。前提としてこれら先行研究に共通することは、中国語方言において、句頭の「啊」は語気助詞であると指摘していることである。

林华东 (2007b : 47) は、閩南語においてその語気助詞が出現できる位置は三種あるといい、それは句末・句中・句頭であるとする。この中で、句頭にあるものは古代漢語のそれを踏襲していて、閩南語において典型的とも言える語気助詞の使われ方であるという。つまり、閩南語の句頭に出現する語気助詞のいくつかは、古代漢語由来であること、ならびに閩南語においてはやや頻出する用法であることがうかがえる。次の (3-1) は、それぞれ a. 句末、b. 句中、c. 句頭の例であり、下線部が語気助詞にあた

る（例は林华东 2007b より引用）。

- (3-1) a. 紧来啊！/ 快来啊！<sup>(10)</sup>（早く来い！）  
b. 友个啊赶紧来噢！/ 同学你快点来哦<sup>(11)</sup>。（早くおいでよ！）  
c. 啊钱呢？/ 钱呢？（お金は？）

上記の例において a. 句末の「啊」は、標準中国語<sup>(12)</sup>の「啊」と用法の上では同一であるとされる一方、閩南語の句末の「啊」は、叙述においても感嘆の表現においてもいずれも標準中国語より使用比率が高いという（林华东 2007b : 51）。b. 句中のものは、フレーズの途中とも考えられることから、句末の用法におおむね共通しているものと思われる<sup>(13)</sup>。そして c. 句頭の「啊」は、「話題を聞き手に引きつける」、「話題に対して注意を促す」、「話題を強調する」などの作用がある（林华东 2007b : 49）。(3-1) c. の例では、話題の対象としたいそのお金の、例えばその在り処がどこなのかなど、聞き手に対し回答を求める旨注意を促したい気持ちから、語気助詞として「啊」が句頭に発せられる場合があると考えられる。

補足となるが、この「阿」は「钱」に対して接頭辞を付けて「阿钱」という語彙を形成したものではない<sup>(14)</sup>。閩南語話者に特徴的とされる名詞に対して接頭辞「阿」をつける文法現象がある。仮に、名前の一部を「钱」とする人に対して「阿钱」と呼ぶことは閩南語圏においては起こり得るが、ここでの句頭「啊」は引用元の中国語訳が「钱呢？」であるとおり、接頭辞の「阿」とは異なる用法である<sup>(15)</sup>。

次に、閩南語の句頭における「啊」の発音面を概観する。楊秀明（1996）では、これを [a<sup>253</sup>] とし、[a] の音に声門破裂音 [ʔ] が伴い入声に近い音で発音されると指摘し、林华东（2007b）ではこれを [a<sup>25</sup>] としていて、いずれも上述の「話題を聞き手に引きつける」、「話題に対して注意を促す」、「話題を強調する」のどれかを、後に続く語脈により言い表すのだと

いう。また、楊秀明 (1996) および林华东 (2007b) では、上記以外に [a<sup>51</sup>] や [a<sup>44</sup>] の音を挙げ、これは穏やかな発話や思考を伴う発話の場合において、音に変化がみられたものであるといい、かつ [a<sup>51</sup>] と [a<sup>44</sup>] の二者の違いは、前者が漳州の音、後者が泉州の音であるとしている (林华东 2007b : 168)。文献が基準とした地域の差により、声調に若干の違いがみられるが、閩南語の句頭における「啊」は、発音 [a] に声門破裂音が伴う音 [a<sup>2</sup>] を基本とするものであり、その声調はおおむね [a<sup>253</sup>] あるいは [a<sup>25</sup>] であると考えることができる。

### 3.2. 閩南語語気助詞「啊」の使用状況

次に、句頭語気助詞は閩南語を母語のひとつとする話者においてどれほど頻出される用法なのであろうか。それについて林华东 (2007b) では、例えば閩南語が主要の生活言語である福建省の農村地区や山岳地区では、とある特定の語気助詞が頻繁に使用され、他方で都市部や高学歴に属するとされる人々の間ではその特定の語気助詞が一切使われないなど、使用には個人差あるいは地域差があることを指摘する。しかしその一方で、「啊」については、個人差や地域差によりその使用分布に一定の偏りがみられるものではなく (林华东 2007b : 54)、閩南語を生活の主要言語のひとつとする話者間において「啊」は、特に常用される句頭語気助詞のひとつであるという (林华东 2007a : 166)。すなわち、句頭語気助詞「啊」は、一部の話者にだけその使用が限定される特異な句頭語気助詞ではなく、閩南地区の方言話者におおむね共通して使われる語気助詞のようである。この指摘より、閩南語を使用する人口の多い台湾においても、句頭の「啊」は、とりわけ使用頻度が高くなりがちな語気助詞のひとつとなる可能性を示唆し、なおかつ台湾華語の中に比較的溶け込みやすい句頭語気助詞ではないかと考えられる。

### 3.3. 閩南語語氣助詞「啊」の文法

続いて、文法に関連することを見ていく。林华东（2007a：158）は、中国語における語氣助詞では、その有無は語句の意味には影響を与えないが、その有無の違いは話者の感情の度合いに対して変化をもたらす働きがあるといい、この観点から標準中国語の文末における語氣助詞の用法および閩南語の句頭における語氣助詞の用法は、ともに同じ働きであると見做す。要するに、出現位置の観点からすると、語氣助詞が句末のみに限られるのが中国語であり、句末以外に句頭にも出現し得るのが閩南語ということになる。（3-2）の例では、「啊」の有無は語句の意味に影響を及ぼすことはなく、話者の感情、すなわち「啊」は聞き手に与えるニュアンスに対してだけ変化を与えるのだとされ、これを語氣助詞であると見做す。（例は林华东 2007a より引用）

- (3-2) a. 啊伊继嘛<sup>(16)</sup> 唔知！/ 他什么都不知道！（彼は何も知らない）  
Ø 伊继嘛唔知！<sup>(17)</sup> /            ♪
- b. 啊汝着来食一下！/ 你要来吃啊！（食べにおいで）  
Ø 汝着来食一下！/            ♪
- c. 啊水流甲要彻啰！/ 水快流出来了！（水があふれ出そう）  
Ø 水流甲要彻啰！/            ♪

このことについては、台湾華語にみられる句頭の「啊」も同様のことが言えるものと考えられる。次の（3-3）においても「啊」の有無は、語句の意味に変化を及ぼすことは基本的になく、つまり台湾華語においても閩南語の影響から、閩南語における句頭の語氣助詞に相当する働きを有す文法成分が見られるのである。



(3-3) 啊你要去哪裡？飯要煮好了。(どこへ行くの？ご飯がもうできる)

Ø 你要去哪裡？ 飯要煮好了。

(3-4) 前略… 接著表示如果台灣社會有需要，他就會出現，如果台灣社會不需要，啊你怎麼弄也湊不起來，不過有一點還是要去思考，我知道台灣社會有一種政治上的需要，但是問題是這種組合是不是符合那個需要，這個是要討論的… 後略

(前略… 続いて次のように示した。万が一台湾の社会が必要とするなら、彼は出てきて、またもし万が一台湾社会が必要としないなら、どうやってしても集められない。ただこの一点についてはやはり考えなければいけないことで、台湾社会は一種政治上の主要はあるが、問題なのはこうした組み合わせがその需要にえられるのか、これは討論すべきことであり… 後略)

(自由時報電子報 2019. 8. 18<sup>(18)</sup>)

(3-4) は新聞記事中の一部分において、政治上の人物が記者に反問するかたちとなった発言を記述したものである。発言者が記者に反問するというその様子を、すなわち話題に対し記者に注意を促す会見の情景を、文字のみで新聞の読者へ伝える必要がある場合では、発言者の発した音に従って語気助詞を記載する。これは感情の度合いを記述する手段として語気助詞「啊」を用いている一例である。さらには、同様の報道内容に対して、台北市政府のホームページ中の「市府新聞稿 (プレスリリース)」においては、

如果臺灣社會不需要，Ø 你怎麼弄也湊不起來。但他也強調有一點還是要去思考，他知道臺灣社會有一種政治上的需要，但問題是這個組合是不是符合那個需要，這需要討論。(市府新聞稿<sup>(19)</sup>)

(もし万が一台湾社会が必要としないなら、どうやってしても集められない。しかし彼はこの一点についてはやはり考えなければならないことだと強調した上で、彼は台湾社会は一種政治上の主要があるが、問題なのはこうした組合わせがその需要に応えられるのか、これは討論すべきことだ。)

となり、句頭語気助詞「啊」は〇で示す箇所において記述されていない。語句の言い表す意味に変化をもたらさない語気助詞であると考えることにより、感情の程度を文章に示す必要性があるか否かで、記述の必要の有無を選択できていることの事例であると思われる。同様に、(3-4) から語気助詞「啊」を取り除いても、文の意味に変化を与えることはないのである。

続いて、感嘆詞「啊」と句頭語気助詞「啊」の違いについては、前者は音声に間が置かれる点にあり、なおかつ感嘆詞と主語は文法構造上直結しない<sup>(20)</sup> (杨秀明 1996)。これは中国語の感嘆詞においても同様のことが言え (劉月華ら 1996: 236)、前述 (1-3) 等にもみられるとおり、感嘆詞は習慣的に読点のカンマや感嘆符で区切られることが普通である。一方で句頭語気助詞「啊」は、後に続く語脈との間に関連を持ち、語気助詞としてフレーズ全体に語気を付加することができる (林华东 2007a: 160)。音声は、「啊」と次に続く語彙に間は置かれない。そのためカンマや感嘆符で区切ることなく記述される。台湾華語における事例としても、(1-2) や (3-4) などのとおりである。

また、話題を聞き手に引き付けたり強調したりする作用のみを言い表し、語句の意味に直接変化をもたらさないことから、(3-5) のように陳述句・命令句・疑問句など広く組み合わせることができるという。(例は林华东 2007a より引用)

(3-5) 陳述：啊今年雨水誠足，收成<sup>(21)</sup> 否。/ 今年雨水充足，收成不错。(今年は雨が充分で，収穫高はよい)

命令：啊钱着赶紧提<sup>(22)</sup> 来！/ 钱要快点拿来！（お金を早く持ってきてこい！）

疑問：啊笔尔？/ 笔呢？（ペンはある？）

陳述では特に「今年のこと・状況」について話題を導き出し，収穫高がよいことへの感情を示す働きがあると考えられる。命令ではお金を必要とする状況などで，「そのお金」がまだ出現していないため，そのお金について話題を導き出し命令し催促する感情を示す働きをする。疑問では，仮に何か筆記具を用いて記載をする場面等で，今必要とするものはペンであり，「そのペンは（どこに）？」といった感情を示す働きをすると考えられる。このように陳述句・命令句・疑問句など広く組み合わせることができ，かつ感情の度合いを語気として表現できるがゆえに，文法的制限を受けず自然と無意識のうちに方言要素が台湾華語への出現となることと考えられる。この方言要素の出現については，次節で見ていく。

### 3.4. 閩南語語気助詞「啊」の出現

「啊」の由来について，前述のとおり句頭の語気助詞は，古代漢語（文言文）においてよくみられる用法であるとされ（林华东 2007a, 2007b, 陈晓云 2011），古代漢語においては「発語詞（发语词）」と呼ばれる成分に近いとされる（杨秀明 1996）。発語詞は，古代漢語で中国語の語気助詞に相当するものであり，先行研究（杨秀明 1996, 林华东 2007a, 2007b, 陈晓云 2011）では，古代漢語における発語詞として「夫」，「蓋」，「惟」等が挙げられ，また左松超（2008）ではこれらを古代漢語において発語詞として特に代表的なものであると挙げる。さらに，句頭の語気助詞「啊」は，そのうち古代漢語の「夫」に用法がもっとも近いものであるとし，閩

南語の句頭の語気助詞が、感嘆詞や副詞から「虚化」したものであるとも指摘する（林华东 2007a）。虚化とは、言語の発展の過程において虚詞化、すなわち単独で意味を持たない文法的成分を示す語彙である「虚詞」へと変化することをいう（冯春田ら 1995：611）。そして虚詞は文法構造上、位置が固定されるとの特徴を持つ（朱德熙 2007）。これにより、やはり閩南語の「啊」は、句頭の位置にのみ出現し得る語気助詞であると見做すことができよう。

また陈晓云（2011）では、この「啊」などに見られる句頭の語気助詞の使用は、現代の標準中国語（普通話）からすでに消失したものであり、加えて方言の中でも、南方を含む限られた地域でのみ見られる用法であると指摘する。方言と標準中国語の二者を分けて考えた場合、陈晓云（2011）の指摘するとおり、中国語の規範とされる用法ではないことから当然、中国語からは消失した用法であると言えることができる。しかしその一方で、(3-4) のように台湾においては、台湾華語の中、とりわけその口語表現や口語表現を記載する文章の中で確認できることから、台湾に限り言及するのであれば、これはまだ完全に標準中国語から消失した用法であるとは言いがたい。

このような本稿の観点を補填するものとして、林清书（2013）や林清书ら（2015, 2017）、は次のとおり指摘する。台湾においては、閩南語および閩南語成分を色濃く残す「地方普通話（地方普通话）」が最も普遍的な言語として使用されている。地方普通話とは、方言話者が話す各地域に特徴的とされる音声・文法・語彙のうちいずれかの影響を残し、完全に模範的・標準的とされる中国語の学習途中あるいは模倣段階において形成された中国語のことを指す（林清书 2013：13）。「学習途中に形成された言語」というこの視点は、第二言語習得における Selinker（1992：23）の「中間言語（Interlanguage）」の概念に相通ずる。要するに、台湾の言語環境について、「第一言語としての閩南語」・「目標言語（Target language）」と

としての国語」とこれらを仮定した上で、台湾人が第一言語の影響を受けた目標言語を操る状況が、つまりの地方普通話であると考えられる。林清书 (2013) のこの報告では、研究対象が台湾在住の話者のみではなく、中国福建省の方言としての閩南語話者も範疇としている。つまり、地方普通話が模倣段階の言葉とすることは、台湾のみに限定して考えた場合において、今日台湾に暮らす人々が必ずしも一概に模範的とされる国語の取得を目標言語として習得しようと試みているわけではない。したがって林清书 (2013) の指摘するとおり、閩南語成分を色濃く残すとされる地方普通話が台湾でも使われていることは事実であるが、台湾のみに限っては、それは「学習途中」や「模倣段階」ではなく、すでに台湾の中国語、すなわち台湾華語として一定程度固定化されているものなのではなかろうか。

このように考えることで、台湾において規範的とされる標準中国語のみが必然的に用いられる環境下においては、句頭の「啊」は出現しにくいことに対して若干の説明がつく。規範的とされる標準中国語のみが用いられる環境下とは、例えば、書面での言語使用や、教育における場面などである。書面における文章表現においては、引用符やかぎかっこによる対話の引用時を除いて、句頭の「啊」は基本的に出現しにくいのではないか。つまり、ここから言えるのはほとんどの台湾華語の話者は、意図的に両言語を使い分けることができると考えられるのであり、中間言語として見た場合のように、「学習の程度の差異」が導因で句頭の「啊」を意図せずうっかり転移させてしまうとは考えにくい。

同様に、教育の面においては、例えば規範的とされる言葉を特に強調して教学する必要がある第二外国語としての対外華語教育でも、現状この句頭の「啊」を文法化して教えることは基本的にはない。一例として鄧守信、孫珞 (2004) 『今日台灣』の教材は、台湾の第二外国語教育としての対外華語教育において、台湾独自の表現をとりわけ多く収録したことを特徴とする教科書である。この教材では、解説の際にどれが規範的な用法

で、はたまたどれが台湾のみでの用法なのか、解説を加えた上で取り上げている<sup>(23)</sup>。要は、二言語を混同させるといったことは現状していないのである。このように教える背景には、台湾の人々は閩南語と標準中国語にある種の境界線を引いていると仮定でき、閩南語成分が一体どれであるのか、規範的な標準中国語は一体どれであるのか、これを一定程度理解した上で使い分けているのではないかと考えられる。

では、どのような境界線を彼らは持っているのだろうか。それに対して林清書（2013）では、福建地区および台湾の人々の中国語は、コミュニケーションに際して“相手が理解できればよい”との原則が、彼らの方言要素をあえて標準中国語に残すか否かの判断基準になっていると指摘し、言い換えればコミュニケーションに支障を及ぼす可能性のある方言要素は、彼らの標準中国語に意識的に入ってくることはないという。また陳偉紅（2014：70）では、閩南語と標準中国語の二言語間には、片一方の言語でのみ表現でき得るものがあり、その場合に話者は、どちらの言語を根拠として自身が表現したい事柄をアウトプットするのか選択を行う<sup>(24)</sup>。前述のとおり頭語気助は直接語意に影響を及ぼさず、かつ話者の感情をより豊かに示すことができる。つまり、閩南語成分でありながら標準中国語の中に混ぜても意思疎通に影響を与えないだけでなく、かつ感情を豊かに表現できる。方言要素をあえて標準中国語に残し、自身が表現したい感情を閩南語の語気助詞より借用して言い表した結果が、句頭の語気助詞「啊」であるのではないかと考えられる。

#### 4. まとめ

先行研究において、古代漢語を由来とし一部方言に残るとされる句頭語気助詞は標準中国語からすでに消失されたものと指摘される。その一方で台湾の新聞記事などでは引用符やかきかっこを用いた会話文の記述にお

いて、句頭語気助詞と見られる音声を記録したものが現在もお見られる。先行研究では、閩南方言を母語のひとつとする地域において使われる標準中国語を地方普通話として部類した上で、それは規範的とされる標準中国語の習得途中で形成された一種の中間言語であると見做す。つまり、本稿で扱った台湾華語における句頭語気助詞「啊」を含む方言要素は、基本的に転移の結果であることが先行研究からの大まかな見解である。

句頭に置かれる「啊」などの本例に限らず、語気助詞は基本的に句の意味に直接影響を与え得ないこと、ならびに話者がコミュニケーションに支障をきたさないと判断した状況下では方言要素は転移され得ること、この二つの要素は、台湾華語において本来閩南語のみで使われるはずである句頭語気助詞「啊」が転移する引き金を説明する。

ただし、行政院主計総処 (2010) の統計を前提として、台湾人口の約 8 割にあたる人が家庭内で閩南語、あるいは閩南語ともうひとつの言語として国語を使っていることを考慮すると、一概に習得途中において形成された一種の中間言語として台湾華語を位置づけ、その中で句頭語気助詞「啊」を単なる転移の結果とするのは、今後も引続き議論が必要なことであると本稿においては結論付けたい。

## 5. 今後の展開

本稿は閩南語の先行文献を整理し、標準中国語に関する若干の考察を通じて、そこから台湾華語に関連したことをまとめたに過ぎない。言い換えれば、ここからさらに多くの新聞記事や実際の会話データ集積など、コーパス分析を通じて多くの事例を集め考察を深める必要があり、この点がまさしく本稿最大の不足点である。

その一方で、台湾華語の句頭の「啊」については、これまで当然認知はされていたものの、とりわけ単独で取り上げられることは決して多くな

く、閩南語の先行資料はあるものの、台湾華語に対する報告は管見の限り言及しているものがない。そのため、このように閩南語の先行研究を概観した上で台湾華語を論じることは、若干の意義があると言えよう。

また、新たに具体的な現象から句頭の「啊」に関連する問題提起をすれば、台湾華語においては「要不然」（さもなければ）の語彙を使う会話では、それを同義の「要不」と言うことが極めて少なく、句頭の「啊」を用い「啊不然」と置き換える例も耳にする。これは、閩南語の「抑無 ah-bô／不然，要不然」における「抑 ah」が転移して、「抑不然」となり台湾華語で「啊不然」との音声で使われると予想したが、結局は先行研究からこれを本稿の結論とするに値する文献を見つけることができなかった。これもやはり、コーパス分析を通じて多くの事例を集めることで今後議論を展開したい。

また、台湾の新聞記事においては、特に報道される人物の会話を記載する箇所によく使われるのがこの句頭の「啊」である。中国語学習者の立場に置き換えれば、語学として学ぶ以外にも、例えば地域研究などで台湾の新聞記事に触れるような実践段階における初中級中国語学習者にとっても、句頭の「啊」は目にする機会・耳にする機会が決して皆無とは言えず、台湾において特有かつ常用の文法現象である。では、“台湾において特有”というのであれば、台湾華語の句頭の「啊」は、台湾に暮らす閩南語話者以外にも使われるのか否か。例えば、原住民諸言語を使う人々、客家語を使う人々等も対象として、これには詳細な議論が必要である。これらについては稿を改め、さらなる言及をしていきたい。

#### 《注》

- (1) 出典を記していない例文については、筆者による作例を示す。
- (2) カッコ内に記す日本語訳は筆者によるものである。
- (3) 「列車行進中3度被要求探頭検査 司機嚇傻拒：太危險」<https://www.chinatimes.com/amp/realtimenews/20181025002185-263301>（閲覧日 2019.



08.12)

- (4) <http://dict.revised.moe.edu.tw> (閲覧日 2019.08.12)
- (5) 発音は, [ ] で記したものは IPA・国際音声記号, ( ) で記したものは台湾閩南語由来と考えられる場合に中華民国教育部國語推行委員會の臺灣閩南語羅馬字拼音方案, 標準中国語由来と考えられる場合に漢語拼音を用い記述した。
- (6) 台湾の言語環境の形成において, 客家語や原住民諸言語も当然ながら強い関わりを持つとされるが, 本稿では論題の範囲を考慮したため扱わないものとする。
- (7) 前述のとおり本稿は台湾に暮らす人々が日常のかつ規範性を意識する必要がない状況下, すなわち自然な発話において使用する「台湾の中国語」のことを一律して「台湾華語」と定義した。ここでの「国語」は引用元の表記に従った上で, かつ「台湾における規範的とされる中国語」のことをとくに指すものと定義する。以下, 本文中における国語も同様とする。
- (8) 民国 99 年 (2010 年) の『人口及住宅普查總報告提要分析』の「四, 使用語言情形 (p.26)」による。本稿は, 行政院主計総処 (2010) によりインターネットで公開されている PDF 版を参照した。https://www.dgbas.gov.tw/ct.asp?xItem=31969&ctNode=3272&mp=1 (閲覧日 2019.08.12)
- (9) 同上調査より, 年齢が若いほど国語を日常的に使用する一方, 閩南語は年齢が高いほど使用される傾向にある。(行政院主計総処 2010: 27)
- (10) スラッシュ記号 / で記載するものは, 閩南語に対する中国語訳。
- (11) 林华东 (2007b) 中に中国語訳がなかったため, 筆者が閩南語より訳した。
- (12) 本稿において「標準中国語」は, 前述の「国語」と定義した「台湾において規範とされる中国語」, および「台湾華語」と定義した「台湾に暮らす人々が規範を意識しない状況下で使う中国語」, この二つとさらに中華人民共和国の「普通話」を含む中国語に対して, 「標準中国語」と表記し区別した。
- (13) 林华东 (2007b: 49) では, 伊若无来啊咱就否办喽。(如果他不来, 我们就不办了。) の例文も挙げられていて, こちらもフレーズで区切ることができる。なお ( ) 内の中国語訳は筆者による。
- (14) 「阿钱」として「钱さんは?」の意味も作ることができるが, その場合にはやはり用字を「啊」ではなく「阿」とすることが多い。
- (15) 林清书ら (2017: 58) にも挙げられている特徴のひとつとして, 名詞に接頭辞「阿」を付ける現象である。また, 杨秀明 (1996) においても, こ

- れは軽声で発音されるとし、やはり句頭語気助詞「啊」と異なるとされる。
- (16) 台湾の教育部臺灣閩南語推薦用字に従うと、「咪嘛」は「這馬 tsit-má」にあたと考えられるが、ここでの日本語訳は、林华东 (2007a) の中国語に対応するものとした。
- (17) 「啊」を除去して「Ø」のしるしを付けたものは筆者による。
- (18) <https://news.ltn.com.tw/news/Taipei/breakingnews/2888164> (閲覧日 2019. 10. 31)
- (19) [https://www.gov.taipei/News\\_Content.aspx?n=F0DDAF49B89E9413&sms=72544237BBE4C5F6&s=16F938D9697B2AB6](https://www.gov.taipei/News_Content.aspx?n=F0DDAF49B89E9413&sms=72544237BBE4C5F6&s=16F938D9697B2AB6) (閲覧日 2019.09.13)
- (20) 感嘆詞と語気助詞の違いについては趙元任 (1980 : 403) によると、感嘆詞は基本的に常に単独で用いられる一方、語気助詞は他の語彙の直後に用いるため二者は異なるという。さらに、標準中国語では基本的に語気助詞のほとんどが感嘆詞になり得ることがなく、つまり語気助詞「吗」は単独で感嘆詞として用いることができない等制限がある。しかし、「啊」は感嘆詞と語気助詞のどちらにもなり得る点から、特殊な「啊」を例と指摘している。
- (21) 原文では「勿会」を1文字とした字であるが、入力することができず「膾」に置き換えた。
- (22) 引用元は手偏に「帶」の字としていたが、入力することができず、同字は「theh」と判断し、ここでは台湾の教育部臺灣閩南語推薦用字の文字に置き換えた。
- (23) 「研究生宿舍有在回收電池嗎？」や「日本就業沉淪，43 萬大學生沒頭路」など閩南語からの用法や語彙を、台湾国語として外国人向け中国語中級教材において数多く扱っている (鄧守信，孫珞 2004 : 282)。
- (24) 例えば、閩南語の会話において、中国語で聞き慣れた商品名などを言う必要がある場合、閩南音に置き換えて話す場合と、そのまま閩南語中ににおいて中国語 (普通話) でその商品名を言うなどの選択を指す (陈伟红 2014)。

#### 参考文献

- Selinker Larry (1992) *Rediscovering interlanguage*. NY: Longman.
- 左松超 (2008) 《漢語語法 文言篇》五南圖書出版：台北市
- 冯春田，梁苑，杨淑敏 (1995) 《王力语言学词典》山东教育出版社：济南
- 朱德熙 (2007) 《語法講義》商務印書館 (香港) 有限公司：香港
- 杨秀明 (1996) 漳州方言的句首语句词“啊”，《漳州师院学报》1996 年第 1 期，

pp. 81-84

陈伟红 (2014) 闽南话与普通话语码转换的语用学分析, 《厦门理工学院学报》第 22 卷 第 6 期, pp. 69-74

陈晓云 (2011) 现代汉语方言句首使用语气词情况比较分析, 《长春大学学报》第 21 卷 第 1 期, pp. 33-35

林华东 (2007a) 闽南方言的句首语气词, 《东南学术》第 5 期, pp. 158-168

林华东 (2007b) 闽南方言语气词研究, 《泉州师范学院学报 (社会科学)》第 25 卷 第 5 期, pp. 47-54

林清书 (2013) 闽台“地方普通话”的基本特点, 《福州大学学报 (哲学社会科学版)》第 6 期, pp. 13-17

林清书, 陈筱琪, 何纯惠 (2015) 闽台客家“地方普通话”调研情况与个案分析, 《龙岩学院学报》第 33 卷 第 1 期, pp. 26-33

林清书, 林丽芳, 王咏梅, 陈筱琪 (2017) 台湾闽南“地方普通话”的主要特点, 《龙岩学院学报》第 35 卷 第 1 期, pp. 53-58

趙元任 (1980) 《中國話的語法》中文大學出版社: 香港

鄧守信, 孫珞 (2004) 《今日台灣》世新大學出版中心: 台灣新北市

劉月華, 潘文娛, 故韓著 (1996) 《實用現代漢語語法》師大書苑: 台北市

(原稿受付 2019 年 12 月 14 日)